

47. 骨肉腫切除範囲決定における RI の有用性について

奥野 宏直	石川 博通	石田 俊武	
		(阪市大・整)	
野村 正	大向 孝良	田中 治和	
		(日生・整)	
浜田 国雄	沢 久	増田 安民	
越智 宏暢		(阪市大・放)	
松本 茂一	日高 忠治	中井 俊夫	
		(日生・放)	

目的：骨肉腫の切除範囲を決める場合、X線像のほか骨シンチグラムを参考にその範囲を決めておりその有用性につき検討した。

方法：(1) 腫瘍塊が単純 X 線像に正しい大きさに描写されるか否かを 12 症例で調べた。摘出標本断面で近接関節端より病巣の最遠位端迄の長さを骨髓内と骨皮質外とにわけ測定した。X 線像でも同様に測定した。(2) ^{99m}Tc MDP15—20 mCi 投与した骨シンチでの集積の範囲と摘出標本での腫瘍の範囲を 8 症例にて検討した。

結果：(1) 骨髓腔内病巣はほぼ正しい大きさに X 線上に写し出される。しかし、骨皮質外では、X 線像に写し出されにくい。(2) 8 例とも RI 集積部が長く、骨髓腔内での比較では 1.8~8.2 cm 平均 5.3 cm、骨皮質外では 1.0~5.2 cm 平均 3.1 であった。

以上より骨シンチグラムにおける RI は、骨肉腫の病巣のみならず、病巣の周囲の反応性変化の起こっている部位にも RI が集積し、その範囲は約 3~5 cm におよぶことがわかった。切除範囲を決定する場合、単純 X 線像や断層だけでなく、骨シンチグラムも参考にしてその範囲を決めるべきと思われる。

48. 骨シンチで興味ある所見を呈した転移性骨腫瘍—特に ^{67}Ga シンチとの比較

竹村 猛雄	日高 忠治	松本 茂一	
村上 祥三	中井 俊夫	(日生・放)	
沢 久	中島 秀行	岡村 光英	
福田 照男	津村 昌	池田 穂積	
越智 宏暢	小野山靖人	(阪市大・放)	

悪性腫瘍の骨転移病巣が骨シンチで経過観察中、時には正常像ないしは欠損像を示すことがある。このようないわゆる Cold lesion の成因については Georgen らによ

り報告されているが、いまだ明確な結論は得られていない。われわれは、骨シンチと、ほぼ同時期に施行し得た Ga シンチを比較した時、cold lesion の成因ならびに bone seeking agents の骨集積機序を考える上で興味ある所見を呈した 4 例の骨転移例を経験した。

症例 1 は、68 歳の女性で左腎癌の例で経過観察の骨シンチグラム上の骨転移病巣の RI 集積が経過と共に低下するのに対し、Ga シンチでは同部位 RI activity は増強していた。症例 2 は、43 歳の男性で肝細胞癌例で、症例 1 と同様の傾向を認めた。症例 3 は、38 歳女性乳癌例で、頭蓋骨転移巣は骨シンチにおいて経過と共に RI 異常集積範囲が拡大しているが、病巣中央部の RI 集積は徐々に低下し周辺部にのみ局限していた。一方 Ga シンチは、病巣中央部に一致して RI 集積の増加を認めた。症例 4 は 70 歳男性肺癌例で、症例 3 と同様の所見を呈した。

以上、骨転移病巣における骨シンチで経過と共に cold lesion を示す部位が Ga シンチではむしろ集積が増強し、ついで病巣が大きくなれば骨シンチではその周辺部のみしか集積を認めないことより、骨シンチ上 cold lesion の成因として腫瘍に置き変わったため生じ、周辺部のみすなわち反応性骨新生のみられる部に bone seeking agent が集積していると考えた。

49. 腫瘍部に ^{99m}Tc -MDP が集積した肺癌の 1 例

長谷川義尚	橋詰 輝己	井深啓次郎
中野 俊一		(大阪成人・RI)

小細胞型未分化癌の症例で、bone scan 時に ^{99m}Tc -MDP の肺癌原発巣への集積を認めたので報告する。

症例は 79 歳、男、会社員。咳嗽と血痰を訴えて近医を受診したところ、胸部レ線で異常陰影を指摘され当院に紹介を受けた。右下肺野に大きな腫瘍陰影を認め、気管支鏡検査で、中葉原発の肺癌と診断された。ブラッシングによる細胞診は B₅ で陽性で、小細胞型未分化癌と診断された。検査所見では LDH の高値および FDP 陽性などがみられたが、ALP、血清 Ca および IP は正常であった。なお、断層フィルムを含め、レントゲンのには腫瘍内に石灰化を思わせる変化はみられなかった。ルーチン検査として施行した ^{99m}Tc -MDP による骨シンチグラムで、レ線の腫瘍陰影と一致する明瞭な集積像がみられた。しかし、全身の骨格には著変を認めなかった。多剤併用化学療法および放射線少量同時照射の併用療法を施